



左：磐梯山爆発カルデラの内部。手前の池は銅沼（あかぬま）。下：隠岐・国賀海岸の海食崖。（撮影・筆者）



持続可能な社会に向けて

ジオパークと地理教育

—地域と地理教育の再評価をめざして—

東京学芸大学教授・自然地理学、日本ジオパーク委員会委員
小泉武栄

ジオパークとは、科学的に貴重な地形・地質や、景観として美しい地形や地質を生かした「大地の公園」である。ユネスコの提唱で始まった。いわば世界遺産の地形・地質版といえる。その理念には地理学や地理教育と共通する点が多い。

ジオパークのジオは、ジオロジー（地質学）やジオグラフィー（地理学）などのジオと同じ語源で、地球とか大地といった意味も持っている。ジオパークは当初、「地質公園」や「世界地質遺産」などと訳されることが多かったが、本来は地質だけでなく、地形や、自然に対する人間のはたらきかけによって生まれた棚田のような文化景観、さらには特異な地形・地質の上に成立した生態系や植生なども含む幅広いもので、最近では「大地の公園」、あるいは「大地の遺産」と訳すようになっている。

ジオパーク活動は1990年代にドイツで市民を対

象にした野外観察会を行っていた地質学者たちが、教育上の効果が高く、評判がいいことから、それを広く普及しようと、話をユネスコにもち込んだことに始まる。2004年にユネスコの正規の事業として採択され、活動が始まった。わが国ではユネスコの提唱に呼応して、日本地質学会が「日本の地質百選」を選ぶなどの活動を行っている。

世界ジオパーク認定をめざして

2008年6月、日本地質学会や日本地理学会、日本火山学会、地震学会などの学会の代表や専門家合計11人が集まって、「日本ジオパーク委員会」が発足し、「世界ジオパーク」認定に向けての対応が始まった。

2008年には、5地域から「世界ジオパーク」への登録の申請があり、ヒスイ峡を中心とした糸魚川地域と、洞爺・有珠、島原半島の2つの火山地域が国内の審査を通過した。3地域については、

翌年の夏、審査機関「世界ジオパークネットワーク」から派遣された審査員が審査を行い、無事承認された。そして2010年には山陰海岸が、2011年には室戸が世界ジオパークに認定され、現在、隠岐が審査を待っている状況である。

一方、日本ジオパークには毎年、数地域が認定され、現在、世界ジオパークを含め、20か所が認定されている（図1）。また佐渡島や伊豆半島、箱根火山などがジオパーク認定に向けて立候補を準備しており、ジオパークに対する期待は高まりつつある。

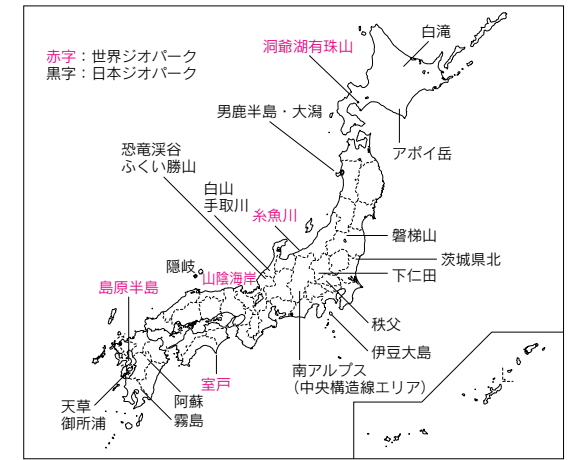
教育と地域振興のために

ただ審査機関による「ジオパーク」の認定は世界も日本も決して甘いものではない。「世界遺産」は、もともとアスワンハイダムによって水没する運命にあったアブシンベル神殿を救うことを目的に始まっており、優れた自然や文化景観を人類全体の遺産として保護することに眼目がある。しかしジオパークの場合は、地形、地質、特異な生態系などの「大地の遺産」を保全するだけでなく、それを研究や教育に生かし、さらにはツーリズムや地場産業を通じて地域の発展に寄与することを重視する。したがってその地域の地形、地質の生い立ちや価値について正確に説明できる科学者が必要である。また自然観察路の整備や案内板の設置、ガイドブックの出版、ガイドつきのジオツアー（地形・地質に中心を置いた自然観察会）の実施なども求められる。地元の名水やお米を使っておいしいお酒やお菓子をつくるといった類の産業の育成も奨励される。基本的な理念は保護することが中心の世界遺産とは大きく異なっている。

日本列島はジオパークの宝庫

審査に関わって感じたことは、日本列島はジオパーク候補地の宝庫だということである。複雑な地質や、南北に長く伸びる列島の特性を反映して、山地、火山、島、河川、海岸を中心に素晴らしい自然景観が、それこそ目押しである。たとえば佐渡島では金山跡を世界遺産にしようと運動しているが、海岸を中心にみごとな海食景観があり、さらに金北山きんぼくさん一帯の植物や新潟大学演習林のスギの巨木林などを合わせると、私はむしろ佐渡はジオ

図1 日本のジオパーク



パークにこそふさわしいのではないかと考えている。残念なことに、わが国では自然史に関する学校教育がほとんど行われていない。このため地元ですら、自分たちのもっている自然の素晴らしさに気づいていないのがごく普通である。ジオパーク運動を機会に、それぞれの地域で自分たちのもっている宝物を掘り起こし、それを教育や地域起こしに役立ててほしいと思う。それは不振をいわれる理科教育や地理教育の振興にもつながるはずである。

災害とジオパーク

日本列島は、昨年の東日本大震災で私たちが体験したように、火山噴火や地震、津波、水害などの自然災害が多発する災害列島である。日本の自然は普段は恵みを与えてくれるが、ときに荒ぶる神となって大きな災いをもたらす。しかし災害は多くの場合一過性であることから、日本人は災害に耐えながら、のちにはそれをプラスに転じさせてきた。火山地域の温泉や豊かな地下水は火山の恵みおにほしだといえるし、鬼押し出しや桜島のような生々しい火山景観は大切な観光資源となっている。また広い沖積平野は過去の洪水の産物であり、土石流のような災害があっても、日本人はそれにめげず、棚田というみごとな文化景観をつくり出してきた。そのような人の営みは、私たちだけでなく、世界の人々にも間違いなく感動と共感を呼び起こすはずである。ジオパーク運動が地域起こしだけでなく、日本の自然と文化、地域を見直し、地理教育再生のきっかけになることを期待したい。